WASON HQ 1166 J7+
Apr. 1892
30. 311

女學雜誌

第三百十一號
明治二十五年四月二日發兌

小說　黒頭巾
＊＊＊＊＊
梅は悲みて送り 櫻は歡びて迎ふ　迎春行
＊＊＊＊＊
論說　文學上聯想

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 311. APRIL 2ND. 1892.

第三百十一號目次

EDITORIAL:—A Trip in Pursuit of Spring.

MISCELLANIES:—"My deceased Wife" (Shien Sanjin.) Dicken's Letter to his son (Mumei shi.) "Riugentoku," (Sangetsu shi.)

LEADING ARTICLE:—The successive thought in Literature.

CHILDREN'S COLUMN:—"The Flower of the Family" (Wakamatsu shidzu.)

LITERARY:—The Elegy and the Preface written by "Raku shi sha sensei." The Words recorded by "Ran-setsu" on the tomb of "Bashō." (Mumei shi.)

NOVEL:—"The Black Hood" (Jiu hachi kōshi.)

"THE FRIEND OF THE ORPHANS."

CONCERING WOMEN:—

WEEKLY NEWS.

●迎春行

●雜錄　亡き妻（紫死山人）○瀛西雜話（其一）ヂツケンスが其兒に與ふるの書（無名氏）○劉玄德（山月子）

●論說　文學上の聯想（上）（櫻井彥三郎）

●兒籃　わが宿の花（第二回）（若松しづ子）

●文學　落柿舍先生挽歌並序○嵐雪が芭蕉が墓に謁でし辭（無名氏）

●小說　黑頭巾（十八公子）

●孤兒之友

●女報　さまぐく

●震地傳道隊會計報告

●物價

女子生徒募集

春期試驗結了各級入學を許す教頭マクレー氏等傭滿期にて歸國の筈に付新に英國の淑女ランキン氏等數名を聘したる處既に來着に付三月廿一日より新教師授業入學望の者は至急申込あれ

大に教則を修正して益完美を盡せり

虎の門內

東京女學館

私立梅花女學校生徒募集（大阪市土佐堀裏町）

本科豫科各級共試驗の上入學を許す○候補生尋常小學卒業生は無試驗入學を許す○別科裁縫を主とし其他實用の學科を授け二年にて卒業○附屬尋常小學校各年級入學を許す○四月八日迄に入學申込あれ規則は郵券二錢を要す

產婆及看病　本鄉眞砂町十五番地　玉生くに

女醫　下六番町六番地明治女學校內にて外來患者を診察す（校醫）荻野ぎん

轉居　東京市牛込區神樂町貳丁目拾壹番地　飯野吉三郎

同所に轉居　東京廢娼會事務所　全國廢娼同盟會事務所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百十一號
明治二十五年四月二日發兌

迎春行

○引

此行の企ては、種々の念ひより發したり、左れば旅中心に感じ、望みに適ひたる事々も、亦た品多し。大率ね、之を四つの紙に書遺す。第一は、明治女學校の同志者に送るの書、第二は、家に留守せる家族の人に遣はす文、第三は、己が心中の覺悟に認ため置くもの、而して其の最后に書遺すものを吾女學雜誌に送る。玆に掲げしむるもの、是れ也。ダル井ン、其の世界週遊記の末に記して云く、歷行の益は、切々片々にあらず、貫通徹透せる一大眞理を想觀するに因ると。余が此行亦た此趣むきなきにしもあらず、京を出る四日、すでに其感ある也。たゞ夫れ本紙上に掲載せしむるものは、之を一つに採りて四つに分ちたる一片なれば、止むことを得ず瑣々切々の記事に止まるものあらんか、讀者の恕しを要む。

（一）離合

三月廿四日、此日は四十日わが家を離るゝ啓行の日なり。平素事多くして、家の人と團欒細話するの暇まを得ること尠し、つねに之を憂ひとなす。此度は亦た久しく相離るゝことなれば、切めては終日閑かに打語らわんとて、出發を廿三日の心地に定め、わざと一日を延したり。起出でゝ見れば、天氣清らかならず、暫らくして雨降り出で、自から家内の靜談を助くるものゝ如し。たゞ仕殘したる用務一ッ二ッを調ふる傍はらには、幼なき人常に變ることなく、切りにむづかり玉ふ。婢と姆とは忙はし氣に働らく、余が首途を祝はんとて、赤飯を炊くと云ふ。女生二人、學校に行かず、余が仕遺しの用務今や畢ると二階にて待遠しげなり。午過る比ろ、多少の茶菓を央ばに、打まとひて語らふ。今更らに新らしく感ぜられ、余は實に今夕旅立するなりと初めて心付きぬ。吾妻ふと立ちて別室に入り、何やらん物を認ため玉ふ、后にて思ひ當れることあり。寄宿の友紫苑山人、一首を詠ず、

（二）出門

其時到りぬ。家族打寄りて祈禱會を開く、畢りて手を握り立つ。告別の辭は出でがたし。幼なき人にはわざと聲高く暇乞ひす、覺らぬ面地にて返辭せざれば、いよ〳〵殘惜しく思はれたる故なり。余は、此時すでに旅行の經驗半ば過る迄を得たりと感じたり。此の如き感は、愛する人に別るゝと云ふの事出で來ざる間は、決して覺ることを得まじき也。門を出で、車に乘る。余は理窟と云ふことの何如に力弱はきかを確認したり。道を廻り、吾が學校に立寄る。兼て生徒の見送ることを制止し、此夕、一堂に會して、別れせんと言ひ置たるに縁る。皆な待ち顔にて集まり居たり。先輩會を主どり、歌をうたふ、最としめりて聞ゆ。余は一言したり。送られて門を出で、顔を外向けて車に乘る。フエアエルの聲くもり、鼻すゝる音彼處此處に聞ゆるを後に、心づよく一走せしむ。此時、余は、全身を彼等に與へずば、生たる甲斐あらずと感じたり。愛すべき女生、今汝等に離れて征く。

（三）伴侶

停車場にては十數名の友に別る、星野君は横濱迄で送らる。横濱にて家兄に會ふ。窓の內より立談す。されど此時ほど辭ば少なくして、情多く言現はしたることはあらず。扨ても、此の二人の最后の知己に別れたり。車輪一轉、音轆々として、吾を載せてゆく。車よ、汝ち何處に向ふ。この時、初めて吾は一個單行するものなりと覺えたり。光渺暗く、車中同乘の人、皆相知らず。直ちに、彼人が門を出る時に贈られたる、文を開ひて讀むに、

今日は御出發の日なりと始めて心付きたる樣にて朝よりたゞチロ〳〵致し居りしのみにて先一月餘りもお顔を見ぬ事よと幾度か考へ候ても何となくまだ Realige 出來ず候ひしが、漸やく先程より心中の景色一時に變りしが如く頻りに淋しく今ま下へ。と參る間も………

心緒一彈せられたるが如く、余は言ひがたきの感慨に溢れたり。余は、從來旅行者が「祈りくれよ」と言ひ遺す言の葉を、實は極めて輕々しく打聞たり、或時は、之を聞くことを反つて厭ひたり、一種の世辭の如くに感ずることのありたれば也。左れど、余は、此度初めて心付きたり、自己、たゞならぬ願ひを以て、人のわが爲めに祈り吳るゝことを渴望するものとなりぬ

。故に、余は新橋及び横濱にて、眞實に此事を友人に賴みたり。今ま、此文の末に、

御歸宅までには今より幾分か多く仕事に與かると出來候はんと心密かに樂み居候あれど何事も御心置なく成さんに企だて玉ひし事を十分に御果し遊ばし聽て御旅行の成功を承はりて一同悅とび感謝いたしたく天父の祝福を最愛の○の爲に只管ら祈るの外無之候…………

吾女生も亦た余が爲めに祈るを信じ、之のみ前途の力草なり。此外に余に伴なふもの何々なりやと想ひ起す、身に寸鐵を帶びず、手に方尺の行季をひつさぐ、腋に確かと抱へたるは、女生が贐にしたる傘なり。行李の内には、母の賜はりし衣と彼人の仕立し下着と、外に入れたるは書籍のみ。書籍には、聖經一卷、レタニー一集、パスカル、テニソンの全集、陸放翁撰詩、王陽明文粹、俳諧一葉集、唐詩撰、其他參考の書若干卷あり。以上即はち余が此行の伴侶なり。

（四）人生行旅の如し

万感胸に切まり、慨痛に堪へず、室隅に平伏して、聞かざる所なき靈に接す、同室の人は定めて不審せしなるべし。夫れ、旅行の人を感動する、一に何んぞ如此く太甚しきや。吾等、包圍に慣れて周邊の流轉するを知らず、たとへは、肉の日に日に改まるも、心之を感ぜざるに均し。たゞ時あつてか、包圍を一變するによりて、眞狀を覺る。あゝ、旅行何ものぞ。天地旅びする乎、或ひは吾れ旅する乎、彼と吾と周時つねに旅行歷遷するものに非ずや。月日は、百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人なり、船の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅びして旅を栖とす、古人も多く旅に死せり。わが頭未だ霜に似ずと雖ども、吾が身は既に浮雲に似たり、金張七葉の界ひ、陶潛五柳のすみか、方丈の廬と共に變化して定まる所ろあらず。人世は是れ皆な旅行にあらずや。吾等、いさゝか歩みを外にして、今ま寓寄する此の天地の眞の家に歸りぬ。あゝ、行旅の變化にあき足らずして遊子家鄕を懷ふの情切なり。抑そも、此の天地間の行旅人は果して其家鄕を求むる所ろなき乎、看よ、汝が動かざる變はらざるの家鄕、天にあり。

（五）學業試驗

眠るとなくまどろむ、旭日、白煙を徹して車の窓に映ず。も

とより、沐浴櫛整せず、直ちに行李より女生が試驗の答案書二百餘通を取出で、車内に今日の課業をはじむ。點々檢査して、ひそかに惟みるに、實に賞罰は難ひ哉。夫れ、答案に對する與點の多少は、宛から學科上の賞罰の如し、而して此の裁判の當を得るとの難き言語に絶す。筆を下し點了し、后ち再三比較して之を改ため、后ち亦た安んぜざる所ろあり、更に改ためて而して尙ほ平ならず、嗚呼評點は難ひ哉、遂に正しきを得可らずと。思ふに、此法は學生を奬勵するの良法に非ず、ことに倫理修身の科の如きに至つては全く點を附せざるを可とす。文の答に倚りて修身點を多少するは、たま〳〵以て僞善を養ふの惡果を生ずるに畢る

(六) 質問

試驗答案を評點し了り、本科二年生の質問二十餘通を見る。余が「修身道話」の組に於ては、談話訓解の外、時あつて諸生に自由の質問を提出せしむ。孟子、ソクラテース、質問を用ひて開發の料とす、質問は實に學生の自發を助け、創思を固め、自修躬講の精神を伸す。此時一覽したる質問の中ち、左に掲ぐるが如き類最と多かりき、

天も晴れ人の心も長閑かに覺ゆる日何に付けても悲しく(何も悲しきとは無きに)夫と同時に神に近づく心切になるは何故に候や

過日高貴(ノーブルチス)てふ修身科のお講義の節「金錢と智によりて人を服する能はず是れ未だ世の中の墜落し果ざる證なり」とのお詞は誠に安心を得候ひしに此度の○○家事件に付ては誠に疑はしく存候日本の社會素より淸からざるなり然れども此明々白々なる道理に付て一人も之が爲に泣く人なく全世界より貴とき一人の魂をして地下に遺憾の泪にくれしむると餘りと申せば解しがたく此事もし五十年百年の昔の物語りとして古老の話し若くは物の本などに讀むときは我等が爲めに何をか言はん不明不開の世の中に止を得ざる事とは思ひつゝ尙且つ死者の爲に泣かずんばあらず況んや文明を以て慢る今日に於てをや幼き時大岡裁判の話し父より聞しが今も尙ほ耳にあり嗚呼世開けて人の命輕んぜられ文化新にして人の自由反つて抑壓せられしか果た日本の社會は遂に金錢を以て左右し得る迄に墜落し果てたるかとの疑ひ心中を往來

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

いたし候
頃日或慈善的の事業の爲に働らく人を養成せんが爲めの事業にかゝらんと言ひしに反對する人のありて如何に心は立派にても金なくしては能はずよしかりに之なくして出來るとするも今日は成し能はざるなりなぜなれば今や其樣な事は概むね人の注意する所となり居れば養成せんとするもせらるゝ人なかるべしと冷笑せしと承はり候全く（實は看護婦の事に候）左樣にはあらざるべしと存候へども右は經驗ある人の言のよしに付心何となう打まどひぬ伺ひ上度存候

（七）西京

西京の家居は自から御殿の風あり、人は何となく雛人形の樣したり、街衢整然、路上塵芥なく、宛がら廣き庭の如し、一望して感ずる所ろのものは、色の合はせ方際立ちて見え、判然分明たる着色の好景一種の味を呈するにあり。少さか格を破りて見ゆるは、西洋館と煙突のみなれど、西京の西洋館は既に西京風に化したり、方形にしてかぼしく、色を染めて窻を多くしたる樣は自から異樣なり、而して。織物會社の煙突は例の如く黒煙を吐けど、天低きく雲多きにうつろひて新らしき狀なし。たゞ近年建築したる同志社の洋館のみぞ趣を異にしたる夫れ家の建築は一の美術にして、人の思想氣質を諳し、叉之を變じ動かすの勢力あるもの也、西京古來失火稀れなり、既に火を失すれば、四方の山風を圍ひ、火紛上に昇りて下に落ち外に散ずるとなし、之を以て西京の家は古來相傳にして、毫も變はらず、人亦此內に住ひて只管らに保守舊偏す、其運動足らざるのみか、食料も亦貧しければ、西京人の骨格は無類に弱はし、生命保險會社の人は云ふ、日本國中西京人ほど薄弱なるものはあらずと。抑そも何によりて之を改たむべき乎。食品は、滊車の便開け其價格下りたるによりて、大ひに改たまりたり。尤とも必要とするは、運動の事にて、女學校に於ける運動を殊に然りとなす。左る處、西京人は婦女子が躰操するを以て怪しからぬとと思惟せり。師範校長加藤正矩氏は曰く、もし彼女を日常りに出して運動せしめなば、父兄は直ちに之をして退校せしむべしと。高等女學校長川原一郎氏は云ふ、大坂に於ては、父兄の故障により躰操を全廢したれど、西京に於ては然らず、此は其の文明思想の進みたる故にはあらず、京地尋常の父兄は未だ決して其娘を出校せしめざるによると。此等の事ともに京人の動かざ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るとを同歎するに歸す。

雜録

亡き妻

紫苑山人

春ごとに
千代のためしの　子の日松
ひきしむかしは　幻か
霞を　わけて　水　清き
野川　の　岸の　壺すみれ
つみしきのふは　夢ならなくに。

諸ともに
花を　をしみし　我が山の
若葉　がくれに　名のるなる
山　ほとゝぎす　はるかにも
きけばむかしの　聲す　なり
殘るはおなうの　垣の卯の花。

白雲　に
羽根うちかはし　飛ぶ雁に
ゆめしさむれは　我が閨の

板間　もり來し　月かげは
早や　傾きて　徒らに
心に　かゝる　峯のあき霧。

我が庭の
池のあし間の　鴛鴦　の
姿　も　今は　見えなくて
歸らぬ　友を　しぬぶれば
唯だ　片はれの　月かげぞ
池の　氷りに　のこりけるかな。

縫ひ果てぬ
衣　の　袖は　我がなみだ
ぬぐはんための　かたみかも
毛絲　ゑらみて　あみかけし
我が　手袋　は　なか／＼に
はめねどぬくき　心地こそすれ。

サフランの
咲きぞみだれし　園の中も
棘　生ひ立ち　水きよき
生命　の　泉　かれにけり
あゝ　パラダイス　今　安づく
仰げば　空に　星ひかる見ゆ。

瀛西雜話（其一）　無名氏

ヂッケンスが其兒に與ふるの書

今日相別れ申候こと愚老に於て甚だ名殘惜しく存ぜられ付ては靜なるをり〳〵其許が沈思三省の助けとも相成る樣一筆書進じ申候。今更愚老が其許を愛し居り候ことと申す迄も無之次第にて生別は死別より哀しといにしへより申候ことと愚老が只今の悲嘆に有之候。然し乍ら人生はなかば別離の旅にて候得者かゝる悲嘆も當然の義にや候べき。今日其許義一身に適當なる生涯を試み候ため出立致さるゝこと愚老に於ても滿足至極に存じ且は是義愚老が眞實なる希望と確信とに有之候。是迄其許が勤務致され候事業よりも是度の生涯の自由に候ことと一層其許に適當したる經驗と存候。とても是經驗なくば行末萬事につけて困難を感ぜらるゝ事に可有之候。若年の常として志望多くは一定致さゞる世に其許が今日に希望致され候一筋を目掛けて奮發せらるゝこと甚だ宜敷候。今後たりとも其許の一旦思立ち候ことと又は力に及び候ことは堅く相守り決して他物の爲に動かされざる樣心掛千万大切に存候。愚老が始めて獨立一個の生計を營みしは今日の其許より幾年か若き位に候ひしが今日あるを致し候ことと全く前に申候精神一つに有之候。いかなることを致さるゝにも決して未練らしき所行等一切有之間敷おのれと同等なる人のみをめがけずよく〳〵先輩の行爲を見習ひて志を大きく持たるべく候。是が爲に幾度失敗を重ね候とも決して落膽等致すまじく勿論自身の爲のみを考へ候折には天道人情に通ずる爲一度は失敗を致すも反て後學の爲と相成可申候。新約全書一部荷物の中に入置申候事是義に外ならず天下廣しと雖も之に越たる書物は無之候間これより人間の義務といふ者を御學び爲るべき樣呉々も申入候愚老義其許の兄等と相別れ候折にも常にこの通り申送り決して一點の私意をさしはさまず居常聖書を拜讀して上帝に導かるゝことを一生の大事と存候。愚老義吾兒といへどもひとかどの了見あるものに對して宗教上の儀式を強ゆるごとき精神にては決して無之候間たゞ〳〵基督教の眞理なるをいふ迄に有之候、生來基督教を相信じ候とも充分に基督をたよりと存じ候はねば不相濟。よく〳〵道念を高く致され朝夕の祈禱を欠かざる樣御心掛可被成候。愚老義今日迄決して朝夕の祈禱をなをざりに致したること無之これが爲に上帝の加護を受くる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ことゝ筆紙に申し難く候。其他申進度義多く御坐候得共一々其義を得ず。何卒一念精厲の上愚老に安心被致與候樣祈入候也

劉玄德

山月子

天地を祭りて桃園に義を結び、赤手を揮ふて琢郡に起り、百千の勁敵と戰ひ、萬億の艱苦を凌ぎ、幾度か死に陷りて、幾度か生を得、三十餘年間世上を流浪して、至誠撓まず、熱涙涸れず、遂に漢室を倒れたるに起す、其功誠に偉なり、彼が赤貧にして樓桑村の茅屋中に、席を織り履を販りて、老母に孝を盡せし時の事を思はゞ、彼が位無く力無く富無く兵無くして、到る處寄る處の群雄に敬慕せられ、畏愛せられ、かの千古の奸雄曹操をして『天下の英雄は唯使君と操とのみ』といふに至らしめしことを思はば、彼が如何に窮し如何に苦む時も、麾下の英傑、決して離るゝこと無く、却て益々之を慕ひ、多くの百姓が、子の慈母を戀ふが如くに仰ぎしことを思はゞ、誰か其人物—位、富、力、兵權、才、智、總ての附屬を除ける正眞の人物—の如何ばかり美くしく大なりしかを感ぜざらんや、人は稱す、徐庶が曹操に事へて、生涯一策を献ぜざりしは、凡人のなし得べき所にあらずと、人は論ず、孔明が出師の表を讀みて泣かざる者は忠臣にあらずと、然り、徐庶が志、孔明が忠は、誠に深く感ずべきなり、されど其志を全うせしめ、其忠をなさしめたる玄德の愛に至りては、更に深く感ずべきにあらずや、思ふに彼れ如何にして其德を養ひたるか、如何にして其人物を偉大秀美ならしめたるか、盖し彼は天を敬ふの心篤く、人を愛するの情深かりしが故なり、其義兵を起すの前、肅然として先づ天地を祭る、何ぞ其心の美はしきや、恰も篤信なる基督教徒が、事を爲す前に當りて共に祈禱するが如し、其漢室を愛し百姓を愛し、將士を愛し、之が爲めに幾度か熱涙を濺ぎたるは、かの三年の間、夜も晝も斷ず涙を流して各人を勸めしといふ、パウロの心に似て、吾人が恍然と佇み眺めて、大に美とする所あり、吾人はただ天を敬ひ人を愛せしが故に、至誠を養ひ、德を建てたりといはず、其貧苦、困難、悲哀、危險の境遇に於て、種々の障碍、誘惑に克ちて、よく天を敬ひ、人を愛し、道を踏み、義を行ひたるが故に然りと云なり、吾人は現今日本の光景を視、所謂改革家の擧動を觀、基督教徒の狀況を察する毎に、未曾て此千數百年前の人物を憶ひ起ずんば非ざる也、切に憶ひ起ずんば非ざる也。

愛は德を建つるものなり
愛は衆德の帶なり　（パウロ）

論說

文學上之聯想（上）

櫻井彥一郎

文學は人の藻思の詞林に出で丶花を開きたるものなり、而してこの詞林の花は再び心に入りて其實を結ぶ。されば文學の人より出で人に入ると共に心界の事なるを以て、其裡に在る無數の現象は各文學上に領する所ありと雖、想像（Imagination）及聯想（Associative of ideas）の二現象の最大地步を有せるに如くものなく、又此二大要素中想像は聯想に比するに其預かる所一步を輸せざるを得ざるなり、聯想は心的作用中至要の現象にして心の及ぶ所殆んど其働作の存せざるはなく、之によりて往事を回想し、或は學術の考察をなすに於ても、同情同感の至情を表するに於ても、平常の談話をして圓滑ならしむるに於ても、判斷推測をなすに於ても、哲學者文學者が以て文學上至大至重の心的作用とせる想像を搆成するに於ても、心裡に隱伏せる雜多の觀念の、聯絡、共存、相關、撰擇等の法に從ひ、一の觀念、一の覺知は、他の觀念を呼び、其觀念は又他の觀念を呼び、此等は時に變化し養成せられて他の狀態を呈するとありて初めて各其働作をなすものにして、心の活動の聯想に於けるは恰も機械に於ける油の如き作用をなすものなり。

心的作用に於て至要の現象たる聯想の文學に關する所を尋ぬるに當り、予は其觀察を文學の兩面に就きて下さんとす、文學の兩面とは論首に於て文學の出入と稱したるものにして、即ち其一面は作者文字を綴りて其藻思を詩歌文章小說の中に挿入するの働にして之を主動的作用と名け、他面は讀者文學をとりて己れに容る丶の働にして、之を受動的作用と假稱すべし。さて文學主動的作用上の聯想を考究するに於て、先づ文章の組織に入て、之を見るに、かの美辭學上のシミレ及メタフォアは、二觀念の間に類似觀念の存するによりて、一觀念出で丶他觀念伴ひ兩者對比せられて、文辭上に現はる丶ものなり。シチクドキー及メトノミーは、總合部分、虛形實形、或は原因結果、主位副位、等の觀念の連鎖によりて、總合は部分を呼び、部分は總合を呼び、虛形は實形を伴ひ、實形は虛形を伴なひ、原因は結果を呼び、結果は原因を呼び、主位

は副位を伴なひ、副位は主位を伴ひ來りて、各其地位を讓りて、詞姿をなせるものなり。又日本文學上尤も著しき、懸り言、例へば謠曲船辨慶の發端「今日思ひたつ旅衣き洛をいつと定めなん」といへるは、「立つ」「裁つ」の訓音相等しきによりて「衣を裁つ」なる觀念を呼出して、「旅衣といひて「衣」の字を出し、「衣」は自から「着」なる觀念を起して、「き洛」の語に「歸」「着」し二字を含ましたるものにして、發音類似より來る聯想の致さしめたるものなり。冠辭もまた聯想によりて生じたるものにして、之を例するに「烏羽玉」の「闇夜」の冠なるは、「烏羽玉の黒き色は夜の暗黒といふ觀念によりて來り、其上に加へて詞容を粉飾せるあり。冠辭は其數多く、中には殆んど其意の何たるを推知する能はざるものあれども、此等も其初は主語との關係の認められたるによりて、用いられたるなるは疑なし。

詩の比といひ、興といひ、そへ歌なずらへ歌たとへ歌などは、明かに聯想の作用によりて、成れるものにして、例へば詩經の「桃之夭々、灼々其華、之子于歸、宜其室家といへる興の躰は、女美しく、年若くまさに嫁するに適せりとの念は、桃の木少く花盛なるを呼起して句をなしたるものなり。又比の躰にて「螽斯羽銑々兮、宜爾子孫振々兮」とは后妃妬忌せずして」、子孫衆多なるは、螽斯の群處和集して、子孫衆多あるを思ひ出し以て之に比したるなり。たとへ歌にて、

我戀は潮干に見へぬ沖の石の人こそ知らねかわく間もなし

といへるは戀々の情禁ずる能はざるも、人之を知らずとの念は蒼波の間に隱沒せる岩礁に到りて對比して詠ぜざるものなり。又

咲けば散る咲かねば戀し山櫻思ひ絶へせぬ花の上かな

といへるなずらへ歌は、子を失ひたるもの、其子を思ふは花を思ふに似たるあるよりして、托して眞情を吐露したるものなり。そへ歌の例として古今集の序には

難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くや此花

の句を引けり。此は仁徳帝の即位をば梅花、霜雪に耐へ、春風習々たるを待ちて、馥郁たるにそへたるものなり。又此等の體の外にても、

ほとゝぎすなく聲きけば別れにし故郷さへぞ戀しかりける

とて、子規の咽鳴して不如歸を唱ふるの聲耳底に徹して、懐郷の情に馳せたるを詠みたる類、或は既往を追錄し或は感雜を隨記せる四季物語、徒草然の如きものは聯想經過の跡を記

したるに外ならざるなり。

以上文章組織に於ける聯想の關係は梗概を示したれば、更に一歩を進め、眼を作者の上に注ぎて之を瞻るに、夫れ人、情を四時の變遷に寄せ、思を人事の百象に紛らし、精を六合に馳り、心を万仭に浮べ、先人の芳潤を吸ひて藻思を頤ひ、之を筆端に屬せんとするや、意到りて文之に稱はず、美人繿縷を纏へるが如きあり、或は字々句々麗艶を衒ふと雖、意伴はず、醜婦靚粧をなせるに似たるものあるは其理他なし、藻思未だ什に充たず、聯想自由に運動する能はざるが故にして、未だ充たざるの藻思を以て十全の文を成さんとするは、これ破卵に鳥の孵化を望むるに異ならざるなり。然れども藻思の境域宏且大にして、觀念の緒の、聯想の系を引くこと嫋々、敢て妨碍するものなからんには、毫を含みて躑躅たるなく、立ちどころに雄篇大作をなし大志想紙面に流離澎湃たるべし。この十七世紀が其大產物として傲るに足るべき「パラダイス、ロスト」は、ミルトンの志想の深遠なる、其敬神の念は百觀念を誘出して、此大想像陶鑄せられたるなり。ダンテの富贍ある思藻は其情人ビートリースによりて喚起せられて「ラウィナ、コメデア」の大作あり。沙翁が其戲曲に於て天然其儘を畫き得たるは、彼の胸裡に鬱積せしもの悉く造化の妙埋にして、觀念の同伴は天然の秩序を再整し、香川桂園が所謂調なるものを得たるによりてなり。愛情に滿てる者にして筆を動かさんとするや、思、其情人、親子、夫妻に及びて此等に新衣を裝ひて紙面に送り。悲哀の人は考の赴くところ悲哀ならざるはなく、字句の流るゝものは咨嗟なり、悽惋なり、義人は正義慷慨の文をなし。敬虔の念ありて、初めて敬虔愛神の音をなし。不德なるもの、文學は腐り。世を樂むもの、詩歌文章小說は其調樂しく。厭世家は「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、」沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現す」との句を以て常套の語となす。嚴儀卿曰詩有㆓九品㆒、曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、曰雄渾、曰飄逸、曰悲壯、曰悽然、而極致有㆑一曰入㆑神と、而して詩に此九品を賦し、神の極致に入らしめんと欲せば、作者先づこの九品を有ち、神に入らざるべからざるなり。故に己れの心に在らざる理想を顯はさんとして作りたる詩歌、文章、小說は字々句々奇を弄び、險なることと舞女竹竿を走るにひとしきも、其價値却て田夫野人粗漏の語をあして眞情

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

を洩すものに劣ること數等なり。歌が近古に至りて衰運を招きたるは、其譏の歸する處題詠をなして心の到らざる處、聯想の働く能はざる處を唸哦したるの事に在りと云ふべし。人の思想は、時代境遇によりて支配せらるゝが故に雄壯なる時代の文學は雄壯の調あり。天地廣しと雖其膝を安ずる處なく湘君を追ひて、身を汨羅に投じたる屈原の離騷は怨で哀めり。又平安の朝世太平に馴れ、月卿雲客は宴遊放逸をこれ事とし、閨門脩まらず、游野郎、婬婦の徒雲上に跋扈せし頃には、泥中の芙蓉たりし紫式部も源氏物語にて、伯父にして姪を妻とし、子にして繼母に密通し、人の妻を竊み處女を傷くる等非禮不義の小說を構へ。降りて德川の治世には刀槍其鞘に還り。昇平は安逸を誘ひ、貔貅の三河武士も化して猫となり、男子にして花街に娼婦を弄ばざるものは男子の分に非ずとなし。不德奸婬の言語堂々たる士人の口に登りし程の時代なれば、從ひて其文學には臭穢鼻を蔽ふべきもの多し。かの勸懲主義を以て自任したる馬琴すら、なほ洞房の秘事を暴露し。近松門左衛門の戯曲は稍々高尙なる理想を寓せるものありと雖、克く男女間の言ふに忍びざるに忍び。西鶴、其磧、蒟蒻本の作者等に至りてはたゞ不潔の記事をなして人情を得たりとせり。蓋し此等は其時代の空氣と作者の境遇は其精神を支配して、臭惡の濁流其觀念に浸潤し、此觀念は事に觸れ物に當りて自覺の面に蝟集し來るも怪しむとなく、之を筆紙に寄て敢て忌憚することなかりしによりて生じたるなり。

兒籃

わが宿の花

第二回　若松しづ子

苦勞は果を結ぶ

ルーセは當途なく逍遙して、遂にとある木の根へ身を投げ掛け升た。しかも靜かな心地の好い夏の夕で、蟋蟀は嬉し氣に集き、鮮に、清き空氣も、どことなく人待顏でした。ルーセは獨り口の中に、

ア、どふぞして善い人になり度ものだ、信徒たるに應ふ人間であり度、其の儘で熬る癖をどうかして矯め遂せ度ものだ。どうしたら信徒らしくなれるだらう。ダガ、いくらしても役に立はしない。勉めても〳〵段々惡るくなる計り

だもの。裁縫や細々した家の用事が嫌で〳〵、書物を讀んだり、勉强したりするのが好で〳〵しようがないのだもの。子供たちは段々大きくなるつておつかさんが仰るけれど、わたしたつて、段々年をとるのに、何一ッ新しいことは覺えやしない。併しそれをグツ〳〵いふのは悪いと知つて居るのだ。ア丶どふぞ人間ら敷人間になり度ものだ。かく感慨し、吾と我心を勵まして居る中に近く足音を聞付て、自分が何か悪いとをして居たかの樣に、ルーセはドツキリし升た。ルーセの跡を追つて來た人は他でなく、ルーセの父でして、今其側へ坐つて、暫らくは兩人とも沈默でした。父が先へ口を開いて、

家の雜用で、おまへも勉强を大に防げられる樣におふくろがいつて、頻にそれを苦にして居る樣だが、わしも誠に氣の毒に思ふよ。併し今の處、どふも仕方がないから、なる丈氣を挫かれない樣にして居て、軈て好いことのあるのを待つて居なければならんよ。

おつかさまさへ御都合なすつて下さると、わたくしは、どこか學校へ參り度のです。あの〇〇といふ處に好い學校が有升から……それに雜費も澤山では御坐いませんから。

父は柔和に

それは、おふくろも悦んで都合するだらうが、おまへなぜ家に居て、學校へ通わんのだへ?なぜ家を離れやうといふのだへ?それとも、モウ家が面白くなくなる時分かな?

おとうさま、どういたし升て、勿躰ない。併し私立小學でフィーラ、先生がモウあの學校へ通ふても役にたゝない…………教へる丈は習へてしまつたからと仰るものですから。

終りの一言は顏を赤らめて言ひ升た。

おまへそのとをわしにいへば好かつたに。

始めておとうさまに申上る必要は御座いませんのでした。おつかさまがどふにか都合して、家で勉强する暇のある樣にして遣ると仰るものですから、私も大層悦び升て、上都合と思つて居り升たが、どふも折々お呼なさらなければ、お間に合ないのですから、據ない譯けなのです。それですから、必竟私しが何も習えない譯けになつて來るので御座い升。

リベカも速に學校を卒業するだらうネ。コーツト、あれは

おまへより二ツ上だらう、
殆んど二年位お上ですが、あの大患ひで、後れておしまいなすつたのです、その中私は先へ進んだものですから。
それも先理由の一ツだらう。
と父は笑ましげに云ひ升た。
さあ、それで、姉さまが御卒業になつたら、おとう様とおつかさまが御都合なすつて、今申した學校へ遣つて下さりませば、私も精〱勉强いたしませう、着物などは極粗末で宜敷う御座い升。其中直に私も小學校を敎へる位にはなれ升で御座いませう。
おまへのいふ事は誠に尤だから兎も角篤と考へて見よう。
といつて父は立つて、徐かに家の方へ歸り升た。ルーセは首尾を量り兼ねて、胸はドキ〱して居升たが、後に殘て是の處に居り升た。此少女が學問に志す熱心は饑渴も及ばぬ程で、非情の困難は其志を消すとか出來ませんでした。そして折々觸れては其熱心に奪はれて、他の心情を打消程でした。又は娘の許願を繰り反し考へ升て、歎息の外は有ませんかつたが、ルーセはそれも一向知らず、又父の額の上に玉なす苦痛の汗も見ませんでした。家に這入つて、妻に向ひ、
おつかさん、ルーセはもうフィーラ孃の敎へられる丈は學んでしまつたさうですな。
母は靜かに、
さうで御座い升よ。フィーラさんが御自身で私にさう仰つたのです。
それをわしになんとも云なかつたじやないかネ。
でも、あなたはそんなとをお聞せ申さおくとも、充分御苦勞があるんですもの。
學校へ遣る工面かどうかつくと思ふかネ。
母は部屋の中を見廻し升た、心の中に、何か賣るものがあらふかと考へて居つたのでした。第一に眼の止まつた古椅子は（私どもが居ないで間に合ふものですから。今でさへ足ない位です）と云ふ樣でした。(私か參つてしまい升たら御飯はどこで上つて、火熨掛は何處で爲るお積りです）とは松の台の申し分でした。番の廻て來た搖籃（私は是非殘つて居て赤さんの守をしなければありません。私はこれまでも辛抱して次々の子供衆をみんな搖つて上ました。それに、あなたの赤さん

の時に守したのも、矢張私でしたに、今さら私にお暇を下さるのですか?)と申升た。母は僅に嘆息の聲を漏し、忍耐に慣た心を勵して、想像を寐室の方に馳せ、そこ、うぶきこゝの引出しを捜索致し升た。想像の使者は直ちに反命して何ぞとで御座い升?繼の當つた古襦袢、色ざめて、穴の開いた初着や前垂れ、時代の知れぬ程の半襟などですが、それさへ無なつたら、あなたはマアどふなさり升。又なくて間に合せられるとした處で、熨斗を附たとて誰が貰つて行ませう)と嘆升た。

又は軈て、

おまへ到抵さうされる見込はつくまいか?

エー、どふも今の處では何とも仕方が御座いませんが、何れ、其中にはどふにか法方がつきませうか。

と雄々敷も、殆ど望の見えぬ巳來に望も歸して、答へ升た。

あの負財さへなければ、いくらか望はあるがネ。

さ様さ、どふも負財といふものが………併し誰も何かしら心配がなくてならぬのですから、それがなければ何か外のとに心配が有ませうから必竟同じ事です。

父はさも苦〱敷といふ顔付で

さう考へられれば御生樂といふものだネ。

今夜は御氣分が悪いのでせう。

ナニ、あの娘さへ滿足させて遣れば、氣分の悪いとも何もないのだ。

暗がりのこと故、兩親が知らぬ中にルーセハ其室へ這入升て、今の談話の終り時分からそれとはなしに聞升て、心の中に、「ア、借財か!それは大變、道理こそおとう様があの通に心配らしくして入して、あんなに一心不亂に働いて入らつしやると思た!それにわたしは學校へ行して、なんと申ても其重荷に重荷を加へたのだ。」そこで、こつそり自分の部屋へ這ふ様にして行升て、朝夕例になつて居る禮拜の時間迄出て來ませんでした。そして家族一同と跪いて、父の祈禱に耳を傾け一々其心願を考へて見升と、思ひ煩と悲歎の其中に籠つて居る譯を、なる程と、始て悟り升た。いつもの通り、父に「お休おさいまし」といひに行升た時、父の耳に口を寄て、小聲に、おとふさま、わたくしは學校へ參り升まいと思ひ升よ。よく注意さへ致し升れば、隨分勉强の暇のないとも御座いません!矢張り、學校へ行くも同じで御座い升もの。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

父は一度ならず娘にキスをし升た。深く諦めた娘の言葉は底意のある事とは知ても、氣安めに態と悟らぬ顔附して居り升た。

さういふことなら、マア今の處はさうとして置ふよ。世の所謂、知識と唱へるものは心靈に於て高尚ならぬ者には極く價値のないことをよく／＼記念して居るか好よ。

ルーセは「實に其通り／＼」と心の中に思ひつゝ、他の子供が寐に就た後まで父の側を離れないでをり升た。父はまた、

さう申たとて決して世の知識學問を賤しむ譯ではないが、道德上のことは他の一切に遙か勝つて居るといふのだ。

ルーセは極く抑へめに、

私は物心のつく時分から德行のことが第一といふことは始終覺悟して居り升た。

父は優しく

おまへの其覺悟がモウ果を結ぶ時分じやないかあ。

ルーセは俄かにはら／＼と涙を流して、

おとうさま、少しも果を結んだ樣では御座いませんか？

ナニ、おまへ、わしの意味を取違つては困り升よ。たゞおまへが今いふた樣に言せ度斗りなのだ。お袋もおれも非常に心配して始終おまへの樣子を見て居りながら、おまへが近頃好ない習慣を改めて、萬事新な心掛になつて居る事は疾くに承知して居るのだ。それ故、いつそ打明けて、心の中のありのまゝをいふて聞せた方が好からうと思ふてな。

おとう樣、仰る通りですと、宜しいのですか、中／＼さう參りませんで困り升。先程もおつかさまが私の書物を讀んで居る處をお呼なさい升た時、私はぢれつ度思升た位ですから、私はモウ／＼何の役にも立ない、矢張り、私は信徒らしくない、まつと信徒ならば、かふした心持も起らない筈と思つたので御座い升。

イヤ、信徒が實際さうだと好けれど、中／＼さうでないのだ、矢張りさま／＼好くない考へも起すのだ。併し信徒が他の人たちと異ある處は惡しきに居て決して惡しきに安んじないことだよ。自ら行狀を謹んだり、又神の助を仰ひだりして、惡に勝つ迄は頻りにそれと戰ふのだからネ。

ルーセは悲しさうに、

併し私はいくらさういたし升ては何の効も見えない樣で御

座い升もの。自分でかふいふ事に誘はれても必ず〳〵氣をゆるすまいと決心する、直ちに、同じ惡い事をいたし升もの。

もしさうなら、おまへ直ぐと、神へその通り申上げて、信實心より己れの罪のあることを悲しんで、是を憎み退けることを得る樣にと祈禱したら好いだらう。

それもいくらも致して見升たが、矢つ張り役に立ない樣で御座い升もの。

併しおまへが追々辛抱づよく、柔和になつて來るのが日々の樣に眼に見えたよ。お袋始め、わしも氣がついて居るよ。どの樣な不完全な、祈禱でも神さまは必ず捨て置きはなさらないからネ、それはわしが慥かに請合ふよ。

ルーセは父の言葉に慰められ勵まされ升たの久しい間自分は暗に辿り〳〵つて、殊に何事も心に潛めて、人に語なかつたとは兩親の心痛の種で有つたのでした。然るに今日こそは長く張り詰めた氷りが春の日和に解け初めた如でした。もそつと充分に心の中を語ることも易しいことでしたが、最早それに及びませんでした。一眼見た斗りで、父はルーセの惡きを忌んで、聖きこと、義しきことを求め始めたことが分り升て、最早此分では、自然神の補助によつて勝利を得るに違ひないと思ひ升た。それ故、父は再び吾に神御前へ跪づかせ、嚴肅なる短かき誓願の中に己も娘と共に身靈を悉く神に捧げ奉る旨を陳べ、間もなく、伏戶に着き升た。ルーセも心の重荷も取られた思ひで、悅びつゝ寐室へ這入り升た。數月以來、此少女は己れを神に獻げた心持にあり升たが、全く受入れられたか、さうであいかと、判然分るまでは德行を勉める樂しみが薄く、持まへの落膽する僻が襲ひ來ると共に、誠に淋しく感ずることかあるのでした。これはまた認める處が足ない處から自然平和も進步も充分でなかつたのでした。「サアこれからは神の御補助を得て着々進步しないではと、此時心に決し升たが、此時より落膽した例がなくなり升た。

文學

落柿舍先生挽歌

原注曰。此歌四章。而後。加興聲之歌三章。漢無此法。蓋和文一體歟。さわりこれは故人獅子庵の筆の跡にて風俗文選の歌の部に見ゆ。落柿舍先生とは向井氏去來のことなり

ことしいかなる年なれば。かくあぢきなき人をのみ見るらむ去年の神無月は。浪化の君にわかれて。霜の光に名を慕ひ。粟津の丈艸は。此きさらぎの願ひにみちて。花の陰に歸りたまひぬ。卯月のはじめは。落柿舍に日をくらし。其事彼事かたりあひて。是より誰が身の上をや。烏も啼くらむと。はかなみいひしが。去來はいはるゝ人の數に入りて。かくいふ我ばかり殘り居たらむ。沖の船の友をうしなひて。老の波のよるかたなき心地ぞせらる。なき人のこのごろおほき世やさらにと。むかしの人のなげかれしも。かくあぢきなき折なるべし。人は二十ばかり。三十も過るまでは。おのれが友達も。同じ心のすこやかにおひたちて。たま〳〵なき人の上を見ても。あはれとは思ひけめ。おどろくほどの悲しさにはあらず四十路も過行ほどよりは。いくとせの交をかさねて。その人ならねばこの事はしらず。あはでは戀しう。見ざらんはいかにと。文にもいひかはすほどに。けふは其人もなくなりて。世はさて果敢なきもの哉と。ことしはじめてしらるゝ。誠に此人の風雅は武門より出れば。かたきところにやはらみありて。先師もそれをゆるし給へりしが。我はやはらぎたるところにかたみあらむをと。逢ふときは戲れていひもしつ。まして蕉門の高弟にして。吾輩の先生なるをや。何にか此人を惜まざらむ。我のみかくおしむにやあやし。その歌に曰く

家は聖護院の森にかくれて
　寒き梟のこゑにおどろき
名は落柿舍の梢に落ちて
　空しき秋の色を恨む
　　世ははたかくならむ
　　我はたかくならむ
窓のあらしにともしびをまもり
　軒のしづくに影をしたふ
　　おしむべし、あゝ
　　かなしむべし、あゝ

柿の木もあれ行猿のなみだには。夜こそねられね。人も歎くらむ。嵐の山の山あらし。世にあらしとは山ぞしる。嵯峨野に人のさがなごゝろや

嵐雪が芭蕉の墓に謁でし辭

十月廿五日。共桃隣出武江。而暨美仲寺。芭蕉翁之墓歎唱

いつの冬か凩のうしろむきそめ葛のはのおもてみし秋より春にわたり杖に覺め笠に眠り小蓑に病みつゐの浮世をおにはになして枯野にあそふと聞へ給ひし一句を今さらのうつゝになしぬ其角はさる契ありてや生前のたいめ後の事迄とりおさめつかへけり遠き境の人はいまだしり及さずや江都に心ざしを盡せるたれかれところ〳〵に席をかまへて追善興行のくさぐさ袖に袂にひろひかさねて往くかた歩みを忘れ富士もみず大井もしらぬ寒天かけて霜月七日のゆふづくよのほどに義仲寺の冢上にひざまづく空華散し水月うちこぼす時心鏡一塵をひかざれば万象よくうつる此師この道においてみづからを利し他を利して終に其神竭きず今も見たまへ今も聞きたまへとて

此下にかくねむるらむ雪佛

嵐雪拜

これは十一月廿二日夜興行さある追善員の序なるべし枯尾華の下の卷のはしめに見えたり

小　說

黑頭巾　十八公子

黑頭巾一篇米の文豪芳逑溫先生が著すところ。字々悽酸、句々凄其、鬼氣人を襲ふて、讀むものをして轉た悚然たらしむ。先輩抱一庵主人嘗て譯してもて報知叢話に載せたりき。譯筆また森嚴原意を寫出して些の遺憾だもあらざりき。惜むべし、報知叢話一絕再び世にあらはれず。黑頭巾もまた暗澹の裏に消え失せぬ。頃ろ抱一庵主人余に奬むるにこれが譯を以てす、即ちみづから揣らずして、漫に禿筆を揮ふに至りぬ。この冒頭より再譯するに至りては狗尾續貂の譏を恐れてなり　重三後二日　十八公子　しるす

第一回

番僧はいま號鐘の索を手に握りて、ミルフオード會堂の廻廊の上に立ちぬ。里の老人達は腰をうちかゞめて街を辿り來り、美しき面したる小供等は己が親達につれまつはりて飛びくるふもあれば、日曜の晴衣に容子ぶるもあり。洒々たる少年等

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は美はしき少女子の方に秋波を轉じて、安息日の日光こそ他日よりも一入彼等を美しうしたれなど思めり。はや群集は廻廊のほとりに溢るゝばかりになりしかば、番僧は牧師フーパー氏が戶口の方に目をつけつゝも、いざとて鐘を撞きそめぬ。牧師が影のチラとだに見えたらんには招集の鐘の音をやむるは例となりたりしなり。

愕然として番僧は一聲叫びぬ。「ヤヽ何ぞ。牧師フーパー君が面上を掩ひ玉ひしは。

會堂の裡にありし人々はこの聲をきくとひとしく、みな外の方へ見返へりしに、プーパー氏に似たる姿の何時もの如く、物思はしげに會堂の方にすゝみ來れるぞ眼に入りぬ。一齊に立ち上りし彼等が面上にあらはれし驚愕の色は言に盡すべくもあらず。見もなれぬ他し牧師がフーパー氏が講壇の椅子を汚さんとて來りしとても、かくまでには驚かざりしならむ。

「たしかに彼はわが牧師なりと汝は思ふか」役僧グレー氏はかの番僧に問ひぬ。

「いふまでもなく、そはフーパー君なるべし」番僧は答へぬ。彼はウィストパァレーのシュウド牧師と講壇の席をかゆる筈なりしかど、昨日に至りてシュウド牧師より俄かに葬儀の說教にとて招かれたれば、この度のみはゆるされてよといひおこされしほどなれば」。

かゝる一方ならぬ騷擾の源も、打見にてはいとさゝやかなる事らしう思はれぬ。フーパー氏、年三十才ばかりにて、その風采紳士たるに恥ず。今なほ定まれる妻とてはあらざれどその身のまはりの清らかなるは、何事にも心つく妻のありて、そが頸飾を洗ひ張り、日曜衣に積もりし一週日間の塵埃をよく打ちはらひ居るらんと思はれぬ。さるに今日のみは如何にしけん。一條の黑覆面、彼が額のあたりに括られて、呼吸の度每に打ふるふばかり下邊に垂れたるが、ヒタとフーパー氏が面を掩ひぬ。近よりて打見やれば二枚に折りたる絹紗の覆面は口と頤とをのこして、全く顏をかくしたれどフーパー氏には總ての有情非情の萬象を打かすめて見るのみにて、いたく視力を遮ぎるほどにはあらざりしならむ。かくてフーパー氏は己が身の前に暗澹たる物蔭を影げつゝも、形而上の事のみを考ふる人々には普通となり居る如く、やゝ腰うちかがめて、地上を見おろししづ〱と進み來りしが、倘會堂の

上り端に氏を待ち居たりける寺役人を打見やりて、いと慇懃に禮をなしぬ。されど人々はいたく驚愕に心うたれたりしかば、とみには答禮なさんともかなはざりき。

番僧はいふ「かの絹紗の裏にフーパー氏が顏の裹まれたらんとは、われ如何にしても思ひがたしと。教會の方へ身振おかしく歩み去りし老婦人はつぶやきぬ。「あな、おぞまし。彼はわが面を打ちかくして、いと恐ろしきものとなしにけるよ」と。

フーパー氏につゞきて敷居を越えなんとせし折しも、役僧グレー氏もたま突然叫び出しぬ。「わが牧師は物に狂へり」と。

孤兒之友

○孤兒の友の仕事

其二

(一)各孤兒院が、寄附金錢物品の報告等の依頼に應じ、毎月一回づゝ孤兒の友欄内に於て之を報告し、又緊急の通知報告等の機關に當つべし

(二)各孤兒院の教育用品買入、及び農事の問答、種子の調達等は、孤兒の友に於て其勞を執り、其他諸般の用事を出來得べき丈け之を辨ずべし

(三)各孤兒の手工職業及び原料品の購求製作品販賣等を廣く質識するの便宜は、孤兒の友欄内に於て爲し得らるべし

紙面の都合に由り報告は次號に於てすべし

女報

可愛子編

●細川侯爵夫人　は去月二十三日午後五時三十五分新橋着の滊車にて、熊本より歸京したり。

●日本赤十字社錄事(二)〇義捐發起者に返翰　在伯林日本帝國名譽領事カール、ウオルフソン氏が、愛岐兩縣下の震災被害者に對する義捐金六千九百麻克を收集して之れを同社に寄托したることは曾て新聞紙上に見へしところなるが、今同社は其厚志に對し、返翰を送付し以て鳴謝の意を表せり。

〇萬國赤十字會滊車賃等の割引　本年四月廿一日、伊國羅馬府に開かるべき第五回萬國赤十字會議に參列する委員等の滊車賃等割引する由、伊太利中央社より報ぜられたり。

●女子高等師範學校卒業證書授與式　女子高等師範學校に於ては、本月二十四日卒業證書授與式を擧行せり、當日來賓は大木文部大臣、辻文部次官、同省高等官立學校長、及卒業生等凡百名。

(附屬小學校授業)　午前九時
(師範學科卒業生)(附屬幼稚園保育)　同九時三十分
(師範學科卒業生)(生徒職員來客式場に入る)　同九時五十分

一　唱歌
二　卒業證書授與
三　校長式述
四　女子高等師範學科卒業生總代謝辭
五　附屬高等女學校卒業生總代謝辭
六　附屬小學校高等小學科卒業生總代謝辭
　　唱歌
七　來客職員生徒退場

卒業生の種類及人員

女子高等師範學科卒業生

茂木ちゑ(秋田縣士族)	渥美千代(和歌山縣士族)	代島奈加(北海道廳士族)
平野のち(京都府士族)	三角　錫(靜岡縣士族)	稻野　鈴(石川縣士族)
井口あくり(秋田縣士族)	元吉宇志(高知縣士族)	染谷ふく(群馬縣平民)
坂井　鈴(石川縣士族)	深川さし(岐阜縣平民)	加納しゆう(岐阜縣平民)
井上てつ(山口縣士族)	古市　貞(石川縣士族)	平川さよ(東京府平民)

附屬高等女學校卒業生

小林ひで(東京府士族)	竹井みち(埼玉縣平民)	坂部のぶ(佐賀縣士族)
原田きち(栃木縣平民)	山室のぶ(東京府士族)	金井さう(栃木縣士族)
山岡ふき(廣島縣士族)	首藤さも(宮城縣平民)	高山吉江(宮城縣平民)
今川やへ(東京府平民)	谷　みつ(東京府士族)	中村けい(千葉縣平民)
三浦りやう(東京府平民)	松園さく(東京府士族)	

●跡見女學校卒業式　去月廿七日同校に於て卒業證書授與式を擧ぐ、校長跡見花蹊女史の祝詞、及び卒業生總代大谷惠子の答辭等ありたり、卒業生は左の如し。

(全科卒業生)大谷惠子、(書畫科卒業生)池田孝子、茂木榮子、田中德子(和漢英學科卒業生)廣田美代子、(英學科卒業生)吉見捨子、堀內花子(和漢學科卒業生)佐藤利尾子、(漢學科卒業生)大內利惠子、(習字科卒業生)西村信子。

●一話一泣　勝海舟翁一生に一人の友あり、故西鄕南洲翁是なり、今春西鄕夫人上京して、弟從道君の邸に在り、海舟翁行て之を訪ふ、一話一泣、殆んど古人に會ふが如くなりしといふ。

●植木枝盛氏追悼演說會　は東京婦人白標倶樂部の催しにて、去月二十六日本鄕春木町中央會堂に開かれ、德富猪一郞氏外一名の演說ありたり。

●石橋忍月居士の結婚　法學士石橋友吉氏は、今度西園寺公成氏の令孃秋子と目出度結婚せし由。

●サモルセット侯爵夫人歡迎委員　東京婦人矯風會にては、去る三月十二日の委員會に於て、此度來遊あるサモルセット侯爵夫人歡迎委員を、海名えりん子、渡瀨かめ子、竹越竹代の三氏に托するとに决せり、因に云ふ、我社よりも一人迎接して夫人の意見を聽かんとす。

●禁酒、廢娼演說　東京婦人矯風會の支部なる千葉縣婦人矯風會の周旋にて、過ろ日禁酒廢娼の演說を開きたり、津田仙氏も招きに應じて赴かれたりと。

●在米の女子震地傳道隊事務所に五十圓を寄附す　今其書翰を左に載すべし、

(上略)偖て震地慘情を諸新聞上に拜見致し且つ諸兄姉が其救助の爲め各自御盡力の樣子委しく承り小女身は數千里の異邦に遊學なしあるも如何にもして僅少ながら我同胞に對し同情同感をあらはし度存じ去る年最終の日數處の傳道會或は安息日學校(昨年自ら日本國に付て講議致せし地方)に文よせ同情の諸君に訴へし處今日二三の諸教會の寄附と僅少ながら小女休暇中旅行なす爲たくわへし金子合せて金五拾圓を得て候之をしも傳道隊へ寄附致し度存じ候願くは貴兄同隊會計の許に御造り被下度偏にねがひ上候先は御依賴までかしこ
〇〇〇

二月十日　米國　塚本不二拜

東京　塚本普治殿

●少女に傷くろ者　あり、九段、富士見町、神田錦町、牛込等に出沒す、警官未だ捕ふると能はず、去月二十五日、又神田の少女十七才なるを傷く、或る靑年等怒りて女裝して兇徒を捕へんとする者あり。

●吉原の櫻許可せられず　兼て出願中なりし吉原仲の町櫻植附けは、許可せられずして、願書却下せられたり、吾人は矯風上大なる關係あるを思ふて、深く之を喜ぶものなり。

●辻せん子氏の就眠　上州甘樂教會教師辻密太郞氏の妻君せん子氏は、產後病の爲めに去る十七日永眠せられたり、女史の小傳を得たれば、次號の雜誌上に掲載すべし。

●速成裁縫教育舍　去一月以來靜岡縣藤枝町蓮生寺內へ仝舍を開設したるに生徒

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の入學を乞ふもの續々ありしが、中頃教師差合を生じ歸鄕せられたれば、其儘休舍の姿なりしも、愈去月二十一日より巨教師の來舍を得、二十三日より再興せり、裁縫、女禮式、茶の湯、活花等に至るまで、着實に教授する由、且つ遠隔有志のためには別に寄宿の規定を設けたりと云ふ。

●長歎大息　岐阜縣下に於ける風俗の頽敗は實に甚しきものあり、木曾川堤防に働く工夫幾萬、惡風を齎らし來て、其地の婦女次第に醜行に陷る、謠ふ所の謠、誠に聞くに忍びざるなり、小學校の生徒また之に唱和す、而して學校は多く倒れ燒けて教育施ずに由なし、假屋僅かに教員の手製に成るも、父兄貧無くして生徒を出すヿ能はず、熱心の教員、無給にて務むと雖も、これも永續するヿは難かるべし、嗚呼一方に於ては淫猥の風日に長じ、一方に於ては教育の道殆んど絶せんとす、吾人は彼地の義人と共に涙を揮ふて之を天下の同胞に訴へ、切に其救濟の策を仰ぐなり。

●京都同志社女學校文學會　は今度組織を一變して生徒の方に一任したり、中山、白神、長野の三女史理事に撰まれ、去る十日其第一回を開きしが、例の如く英文邦文の朗讀あり、終に松浦教師の之に對する概評と朗讀法の感話ありし由。

●同志社女學校講話會　は毎月二回開き、同志社の諸教師を聘して學藝上の講話を請ふといふ。

●女生徒病院を訪ふ　同志社女學校の生徒は、毎土曜花卉を携へ、同志社病院を訪ひ、病苦の人を慰むるヿを始めたりと。

●淺井さく子氏を舍監とす　大阪梅花女學校にては、今度大に寄宿生の管理薫陶に力を盡し、貞靜淑雅の風を養成せんとて、嘗て東京婦人矯風會副會頭及び同雜誌編輯長にして長榮女塾長たりし淺井さく子氏を舍監兼教員として招聘したりといふ。

●大坂に於ける藝妓の取締　四月一日以後、大坂藝妓の遊廓外に出づるは、其の都度必らず警察官、又は巡査派出所へ屆け出づべきヿとなりたり。

●貞女　伯州八つ橋郡安田村藪田某難病に罹りて追々見苦しくなる、其妻里子年尙若くして、懇ろに之に侍し、看護周到十年一日の如し、其姉、里子に離緣を勸むるヿ屢ゝ、里子容を改めて曰く、姉上の仰せらるゝ所一應有難く存ずれど、斯る不實無情の擧動は決してなすに忍びず、斯る時の夫婦なり、疾に罹り貧窮に陷りし曉に、夫婦別れするが如くにては、此世の中は立ち行くまじと、之を聞く者何れも感心せざるはなく、此事縣廳まで達し、奇特なりとて、一度ならず兩度まで賞譽金の下賜ありしとぞ。

●札幌スミス女學校　は去る二十二年九月の成立にかゝり、女子に適當なる教育を授け、其智力を發達し、德性を涵養し、善良なる妻女となるべきものを養ふを以て目的とす、學科を分ちて、日本學及び英學科、普通科の二科とし、修業年限は六ヶ年(但し豫備科三年本科三年なり)、校長は大島正健氏、教員は大島正健氏、菅田勇太郞氏と、エス、シー、スミス、矢島達子、高野愛子の三孃にて、現時生徒總數三十四名(通學生十四名在塾生二十名)あり、附屬幼稚園には幼兒二十四名あり、高野氏專ら保育の勞をとらる。

●山梨縣通信　◎山梨英和女學校　にては本月初めて第一回卒業生三名を出す由、同校は兎に角田舍には珍らしき學校にて、生徒は日本といふ觀念强く、武士の氣風を慕ふと聞く、科目は、和漢學、漢學、裁縫の三科に分れ、現在生徒の數二十八人あり、年齡は十二より十九歲位までなり、教頭はミス、ウヰントミユート孃にして、教師はミス、プレストン孃、金子せん子、吉田きよ子、前田しづ子、諸孃、其他の男教師なり、本月六七日頃教頭ミス、プレストン孃、歸米の途に就かれ、一年餘まり滯在して再び日本に來らるゝ由、同孃は品德高く、よく生徒の服せし由なるが、歸ると聞きて人々別れを惜み、送別會の折には、十三里も隔りたる南都留郡邊より來會せしものもありたりと。

◎甲府教會　に於ては金子せん子、林ともえ氏等、最も熱心の信仰を以て、教育、慈善、矯風等の事に隱れたる働きをなせり。

●長野縣通信　◎松本婦人會　は松本町の人代言人、判事、教師及び有力なる商人の妻女五十名許り協合して設立する所なり、同會は時々會合して、有名なる人を聘し、育兒法、看病學、衛生、家事經濟等の講義を開き、併せて相互の交際、智德を練習する目的なりしが、今回同會員一同奮てバザーを擧行し、去る二十六、七、八の三日間大に販賣し、利益は之を折半して、其半ばを孤兒院に寄附し他の一部を同地に女學校を立つる基本金とする由、且他の慈善會は美を競ふの弊ありとて、バザーには、務めて服裝を質素にせりといふ。

●三重縣通信　◎卒業女生徒　去月十一日養正高等小學校にて卒業免狀授與式を行へり、卒業せし女生徒は七名なりし、修成尋常小學校にても去月十二日に行ひしが、卒業女生徒四十二名(男女生徒五十二名)にて、其年齡は最長十三年十一月、最抵九年三月にして、平均十年七月なり、但し男子は十年九月なり、而して職業は商業二十三人、農業四人、庶業十二人、工業二人、勞業一人にして、學課平均點數は八十點(男八十一點)裁縫は平均七十一點なりしとぞ。

◎孝女とせ紀念碑　連部村孝女とせの紀念碑は、大に寄附金も集り、碑文も已に出來せしを以て、公園に建設せんとて發起人より藤堂家に伺ひし處、此程許可ありたれば、近日の內起工に着手すべしといふ。

◎三重縣私立正禮學舍　同舍は東町に近頃興りしものにして、女子に封建時代の禮式と裁縫とを教授すると云ふ、とても永續きはせまじとの世評あり。

●宮城縣通信　◎私立裁縫學校の廢校　仙臺市元茶細五番地の同校は廢校せり、惜むべきなり。

●維納府婦人商業組合の紀念祝會　同會は本年第二十五年回を祝しぬ、之に學ぶもの生徒は平均一ヶ年各組を通じて大凡一千五百人許にして既に學を了へしもの佛語科にて二千六百八人簿記科にて一千三百名裁縫科にて五千五百九十五名なりと云ふ。

●チベリン大學の受產　同大學は去ル一月九日バハマ島にて永眠に就かれたるミ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

シガン州コールドウオーターのジユリアデイキンソン孃より四万弗の遺産を讓受けぬ此くして其内二万弗は當今エー、エー、エフジヨンストン夫人が占坐せらるゝ同校夫人教頭の校用資産に充て他の二万弗はテルビンヘンナ女醫學士が監督なる婦人醫學部資金に充つるとさなりぬと、此學部は先きにも曾て同孃より若干の資金を婦人特志者の勉學に具ふんとて寄附せられたる事ありと云ふ實にデイキンソン孃こそは世の博愛家の中に屈指さるべき正當なる人とこそ云ふべけれ。

●婦人速記者公會に現はる　デンマルク國コペンヘーゲン府なる公會議事堂に於ては婦人を速記者として用ゆるに至れりと云ふ。

●婦人美術的職業奬勵展覽會　來る八月より倫敦にて開かるゝ夫人の裝飾品並に諸美術品展覽會は一般の利益を謀らんとの目的に出て出品を婦人の用に具はる裝飾用の贅澤品並に必要品のみ限り荀も美術的の趣味に乏しく一般婦人の執着熱望せざる如きものは之が出品を許さず主に繪畵彫刻或は編細工レース織裁縫品料理品又は古代のレース、絹、絹紐、靴、香料、扇子等の品々ありと云ふ

●ヘンリーワードビーチヤー氏曰く　いとも卑くき位置ありと見ゆる働を取り之れに勤勉せよ人は必らず御身を上めん常に御身が在る處に滿足と誠實とを以て忠勤めなば御身が位置は自然に高まるべし、然して其高まりたる處に於て猶初の如く務めなば更に一段進みたる位置を與へられん此して至る處に全心全力を擧けて盡しなば御身が位置を常に其初歩と遙に去て愈々進み上るべし。只警戒しむべきは故更らに高まらんを願ふの事なりそは好果に反し愈々詭計口實失錯等の弊を重れ遂には誘惡犯罪の谷に陷らん。

震地傳道隊會計報告　　婦人矯風會

●入之部

○金二百二十六圓拾壹錢四厘　　前回迄入合計

○金五拾圓也　　在米國塚本不二子君寄贈

合計金二百七拾六圓拾壹錢四厘

●出之部

○金二百三拾三圓三拾八錢五厘　　前回迄の出費合計

○金七圓八拾八錢

此內譯

壹圓二拾錢　　解隊式廣告料

拾八錢　　隊の印刷物百枚代

二圓五拾錢　　大垣に於て松田氏へ渡し分

四圓也　　大垣より三大目的に付歸京佐々木氏旅費自助會へ返金

合計金二百四拾壹圓廿六錢五厘

差引殘金三拾四圓八拾四錢九厘

品名	三月卅一日
白米（一円ニ付）	
一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇一
三等米	一〇三
四等米	一〇六
五等米	一一二
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗四升六合
越後米	一三八
三河米	一三九
尾張米	一四〇
美濃米	一四一
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗九升五合
上州小麥	一七二
竹林麥	一八五
梅澤大豆	一九五
青柳大豆	一九五
吟小豆	一六二
白胡麻	一二八
黑胡麻	一四五
鹽（一円ニ付）	
赤穗	三、二五俵
大鹽	三、三五
本齋	五、五〇
新齋	五、九〇
醬油（一円ニ付）	樽 分厘 七四 七九 八七 一、一〇 一、三〇 一、六〇 一、八〇 二、〇〇 二、一〇 二、七〇
最上	
極上	
上物	
中物	
並物	
味噌（一円ニ付）	
地製上白	六、八〇〇貫
同上赤	六、八〇〇
同紅赤	四、三〇〇
眞綿（一個ニ付）	
上々入金	一二三、〇〇円
上入金	一〇五、〇〇
並入金	九八、〇〇
松入金	九〇、〇〇
竹入金	八五、〇〇
梅入金	八〇、〇〇
染絹類	
新花色絹	九五匁
同糸好	一三五
地染本花	一四〇
同糸好	一八〇
本糸花色	一七〇
同糸吉	二一〇
猩々紅絹	九〇
白張絹	一一〇
同糸好	一二〇
色太織	一三五
玉糸鼠	一四〇
同絹黑	一五〇
濱縮緬	
大巾上駒	四、八〇
小巾百廿目立	五、三〇
同並物	五、〇〇
六丈絹猩々紅	円
五十目立入仕別	五、五〇
同並	五、二〇
白木綿（一円ニ付）	
玉鶴	三、四五反
綾鶴	三、七五
日の出鶴	四、〇五
若柳	三、一五
稻岡	三、七四
蓬萊	四、〇五
間銘	三、七五
造り	三、〇五
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀大頭	二、五五円
同稀頭	二、一〇
同大頭	一、七七
同中頭	一、五五
同中茶	一、二〇
狹山稀大頭	二、〇〇
同稀頭	一、七五
同大頭	一、五〇
同中頭	一、四〇
同中茶	一、二〇
乾海苔（百枚ニ付）	
洲崎	七五錢
大森	七五
深川砂村	七五
大師河原	六〇
潮田	五〇
上總	五五
鰹節（十貫目ニ付）	
土佐上	二五、〇〇円
薩摩大	一八、〇〇
房總中	二〇、〇〇
銚子上	一七、五〇
南部仙臺	一三、五〇
水油（一樽ニ付）	
地水	六、五〇円
胡麻	一〇、二〇
荏油	一〇、〇〇
桐油	六、二〇
冬	七、四二
坂水	七、四五
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	……
デボース	……
ホーキ	一、六四円
ロシヤ	一、六一

廿二號目錄

女學生

軍士及び兵書…………

人物修養…………星野愼

所感

卒業近くの感……（明治女學校）天野こゝば

玉暇を惜む辭……（女子神學校）森田千子

梅は學びの友……（高川女學校）大森きみ子

和歌四首……（高川女學校）大森きみ子　赤井さら子

論說

英雄……（女子學院）秋野すゝき

如何なるを眞の譽といふや……（女子神學校）松本錦子

教育……（立教女學校）松崎德子

漫筆

梅窓雜感（十五）……山月子

歸京の日……可愛子

寄書

陰晴……無名氏

木村鐙子の傳を讀む……中和堂主人

學びの栞

唐詩選講義……

右は去る廿二日發兌せり

皇后陛下 明宮殿下 御覽濟の書

巖本善治妻 譯

再版

（リツトル。ロード。フホントルロイ）

小公子

小供のよみ本

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遙する幼兒が、幹のくねり、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、かあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネイ、と申たとか。考えて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ筈の者をくねらせる程、無情なとは實に稀で御坐り升。邪道に陷らふとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の德を思ひ起させるは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼兒に限ります。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者故此珍重すべきまろうどを尚一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に轟き渡り、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髮の老者も心頑なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且尚ほ劇に演して非常の喝采を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十頁密書十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。

一冊正價三十八錢。郵税八錢也

發兌元 女學雜誌社

（賣捌店）○東京。瑞穗屋、丸善、小林、東海堂、武藏屋、東京堂、巖々堂、須原屋、金港堂、大藏屋、中西屋、布美乃屋、重陽堂、誠之堂、○横濱。丸善○京都。東枝律、大黑屋○大坂。福音舍、岡島、梅原、○神戸。福音社、○熊本。草野、○函館。福音舍、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述 つれ〴〵草講義	郵税二錢	一冊	價金八	錢
鈴木弘恭大人述 文法口授	同 同	一冊	同十六	錢
船越鼎太郎君著 産婦小兒攝生法	同二錢	一冊	金十六	錢
中島俊子君著 善惡之岐	同四錢	一冊	同卅五	錢
横山雅男君著 婚姻論	同四錢	一冊	同十六	錢
島田三郎、植木枝盛兩君演説 廢娼演説	同二錢	一冊	同五	錢
巖本善治君述 妓樓全廢	同二錢	一冊	同五	錢
島田三郎、巖本善治兩君著 公娼可滅	同二錢	一冊	同四	錢
農學士寺尾熊三君著 植物學	同二錢	一冊	同十二	錢
林學士星野愼之介君著 植物 昆虫 金石 採集法	同二錢	一冊	同十	錢
女學雜誌社編輯 演説著作材料	同四錢	八冊	同四十	錢
巖本善治君著 木村鐙子小傳	同二錢	一冊	同八	錢
訓蒙繪双紙 猫と鼠	同二錢	一冊	同五	錢

下六番町六番地 女學雜誌社

簡易出版

豫約募集延期廣告

小生が、明治女學校高等科女生に口授したる講義の中、左の二書に錄したるものは、些さか大方の是正を請ひ度ものあり、且つ地方に在る女生にして其筆記を見たしと要むるものもあれば、簡易出版法(ミミヨグラフ)を用ひて之を印刷せんとす。同時に毎號殘餘二百冊を得べきに付、下に記す條則にて豫約者に分配せんとす、

女學雜誌社 巖本善治

教育學 女學 ○講義錄

憾むらくは世上の君子と意見を異にするものもあるべし、左れど讀考窮査して多少の意見を開陳せり。

年來此の一科の學を講ずるの必要を感じたる也、前年田口鼎軒君は痛たく之を駁し玉へりしが、遂に尚之を講述す。

右二書各々、一冊中本四十頁物にて、月一冊を配付し。凡そ一年にて完了す。

○代價定

「教育學」「女學」ともに一冊各五錢、郵税二錢、一年分、郵税合せて八十四錢(社に來受せらるゝ人は郵税なし即ち六十錢)の定め、一方丈を約せらるゝも可なり。

○豫約延期

四月一日に第一冊を配付す、毎號二百冊に限る。豫約申込は、一年前金封入、三月二十日迄の事、兩書ともに豫約の人は前金半年分納あるとも無差支。但し定數に超る時は謝絕す。事務は、下六番町女學雜誌社にて辨ずる事。

○豫約延期

右申込期限三月廿日迄の處、期限后續々御申込有之候に付地方は更に御申込期四月廿日迄延期致候間同期限內を失せさる樣至急御申込有之度候

取扱所 麴町區下六番町 女學雜誌社

福音新報

定價郵税共三ヶ月分冊八錢〇半年分七十三錢

基督教徒は其の家族と如何組織すべき乎離婚に付ては如何なる主義を以て標準とすべき乎此らは吾人が最も叮嚀に研究すべき大問題の一つなりとす福音新報は來る四月第二金曜日の分より剴切にして公平なる家族論を連載して應用基督教を開發するの一端に供せんと欲す豫め之を江湖に廣告す

東京麴町區三番地

福音新報社

女學生徒募集

當學期試驗來月初旬に終り、各級に入學生を募集す、有志の者は四月中に申込まるべし、當校設置の各科左の如し（但し規則書は郵券二錢を贈らるれば速かに贈呈すべし）

〇高等科（高等の教育を望む者の爲めに二ヶ年卒業の仕組にて設く）
〇師範科（女教師志願者の爲めに設く）
〇普通科（高等小學卒業者は無試驗にて幼年級に編入す）
〇幼年科（高等小學以下の程度に應じ專ら幼稚者の爲に設く）
〇專修科（英學、漢學、和學、繪學、音樂、女禮、裁縫、速記等專修志願者の爲めに設く）

麴町區下六番町六番地

明治女學校

●●特約大販賣店廣告●●

今般同店と特約致し弊社出版書籍及雜誌大販賣候間本社同樣御用向被仰付度候也

東京日本橋區本町三丁目

瑞穗屋　清水卯三郎

東京麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

藤田東湖先生詩集　月露　（四月五日發賣）

第壹集

正價金八錢
郵送税貳錢
郵券代用一割增

東京市内ハはがきニテ御申越次第直ニ配達ス其際代金ト引替ノ事

天地ノ眞機ヲ穿チ乾坤ノ玄理ヲ發揮スルモノハ詩ナリ而シテ浩々タル天地落々タル乾坤止タ夫レ思想ノ絶高ナルモノハ得テ天地ノ宏大ヲ極ムヘク眼光ノ絶異ナルモノハ得テ乾坤ノ幽玄ヲ穿ツヘシ今ヤ古今東西偉人傑士ノ詩集梓ニ上ルモノ殆ント萬ヲ以テ數フヘク汗牛充棟眞ニ啻ナラサルナリ然レ圧其浩瀚ナルモノハ蕪雜ニ〆金沙玉石ヲ混淆スルノ觀アリ其簡略ナルモノハ撰擇其當ヲ得サルノ憾アリ未タ以テ繁簡撰擇其宜シキヲ得タルモノアルヲ見ス勝堂夙ニ爰ニ見ルアリ今回月露第一集ヲ發行シ載スルニ我國撰世ノ俊傑東湖藤田先生ノ詩篇ニ就キ精ヲ拔キ粹ヲ蒐メタルモノヲ以テスル先生ヤ素ヨリ一詩人ヲ以テ目スヘカラスト雖圧經綸ノ志憂憤ノ氣自ラ禁スルヿ能ハス發メ詩賦トナル其雄大宏濶ナルモノハ以テ天地ヲ呑吐スルニ足リ其沈鬱慨切ナルモノハ以テ鬼神ヲ泣哭セシムルニ足ル其豪宕ナルモノハ崩瀉ノ如ク其高妙ナルモノハ皎月ノ如シ讀者若シ孤燈ノ下寒檠ノ淒涼ニ之ヲ播ケハ先生ノ英姿紙面ニ躍如タリ以テ思ハス肝膽ヲ〆凜然タラシム今ヤ印成リ發行ス江湖ノ諸彥購フテ永ク坐右ノ友ト爲セ〇〇〇〇月露ノ二集ハ横井小楠第三集ハ吉田松陰ノ詩トナシ以下續々慷慨淋漓ノ雄篇ヲハ最モ印刷製本ニ注意シ清楚美麗ノ册子トシテ發行スヘシ

東京本郷區向ケ岡彌生町參番地

發兌元　**文海堂**

●●女學雜誌賣物廣告●●

第二百五十一號より第三百號迄五拾冊相揃

右ハ五拾冊相揃六拾巻丈別段本社ニ備付有之候處、第一號より續々御註文に付今回特別代價引下五十冊一時に御買取の分は郵税共金壹圓にて御求めに可應候部數に限り有之候間至急御申込に相成度候也

右五十冊中の重なる記事は（社說）●吾黨の改革事業〇山中獨語〇天災地震〇教育者の快樂〇日本の基督教〇殖民論〇婚姻論（見鑑）小公子（小說）浮雲胸〇紫海の嵐〇流れの葦〇今はむかし〇無想劍〇腹中の蛇〇枯尾花（文學）花月の遊〇文學上の德義〇ミルトンの詩〇至誠と詩歌〇女性文學史

女學雜誌社出版部

博士デール君著　原田助君序　松尾音次郎譯

活ける基督と四福音

定價拾錢　郵稅二錢

今や世界の大勢と共に批評的の氣風漸く將に我基督教會に浸潤せんとす是基督教進步の一段落として寧ろ喜ぶべしと雖ども亦斯教立脚の地步を確め以て信仰の大本を明にすべきは實に信徒今日の急務なりとす。本書は博士デール氏の原著にして松尾氏の翻譯に係る。其主として論明する所はかの怒濤逆卷く批評界の眞中に卓立し確として活基督を信仰すべきの道を示すにあり。所謂信仰の大本斯教の根蔕を確論せるものと謂ふべし博士は英國ボルミンハム獨立教會の牧師にして。學識卓犖度量寬宏實に現今獨立教會中第一流の人物あり教會の職にある于茲三十餘年夙に英名天下に高し昨夏万國「コングレゲーション」教會の大會あるや氏推されて之が議長たり。又氏は政治社會に於て勢力あり自由黨員として非國教論者としてグラッドストーン派中の錚々たるものなり。以て氏が平生を知るに足る。則ち本書の如き氏が多年の實驗と浩大の識見に由て著述したるものなれば其價値既に定論あり何んぞ贅言を要せん譯文亦簡朗にして意を盡せり。願くは江湖の諸君必ず一本を購求して其所論を熟讀し給はんことを

Seek Truth
And
Do Good

精神的講話

デホレスト君演述　三宅荒毅君譯

定價十五錢　郵稅四錢

君子は器ならずと教育の目的は器械的人物を養成するにあらずして活人物を世に出たすにあり然るに今や教育社會の現狀を察するに智育に偏して精神的の教育を欠く者多し何ぞ偉大なる活人物の輩出するを望むべけんやデ氏玆に深く憂慮し仙臺東華學校設立以來九ヶ年一日の如く誠意誠心以て學生を薫陶し基督教の眞理に基づき精神的の教育を授けらる今や已むとを得ず閉校の期に際し小素氏が講演したる十數篇を編して一小册子となし氏か愛せらるゝところの子弟に紀念の爲め贈らる本書は長幼男女を問はず誰人にても一讀せられなば裨益する處少々にあらざるべし

發兌　大坂土佐堀三丁目　福音社
賣捌　東京新橋出雲町壹　警醒社書店

第四回豫約出版廣告

文科大學教授　物集高見先生著

ことばのその

全一册　凡千八百頁　豫約正價金二圓

九十錢見本に郵稅二錢●豫約期限四月三十日豫約金一圓御送附殘金は五月十五日より送金の順序を以て製本を遞送す

右は古代よりの國語を集めたる字書にして註釋詳明例文許多なれば國文研究に至便なり曾て第三回勸業博覽會に於て公衆の評に由り時事新報社より金牌を得たる美麗の珍書なるとは余が喋々を待たず今已に一本を殘さず因て又第四回豫約を募り五百部を限り印刷に附し有志諸君の請求に應ぜんとす請ふ期限を誤る勿れ幸ひ

●女學雜誌社出版書籍

右今般本社ト特約ノ上販賣仕候間續々御注文ヲ乞フ

東京市日本橋區
本町三丁目
瑞穗屋清水卯三郎　謹白

作文口授　全

鈴木弘恭先生口述　一名國文教科書

雅俗諸躰此書ハ大人カ各學校ニ於テ實地ニ授業シタル者ヲ筆記シタルナレバ國文ノ作例ハ勿論許多ノ熟語ヲモ擧ラレタリ此書ヲ一日セバ如何ナル初學ト雖モ消息記事論說諸躰ノ雅文ヲ立所ニナシ得フルベシ諸君速ニ購テ試ミ給ヘ

出版所　神田美土代町四丁目五番地　敬文堂
賣捌所　麴町下六番町六番地　女學雜誌社

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

活ける基督と四福音

定價拾錢 郵稅二錢

今や世界の大勢と共に批評的の氣風漸く將に我基督教會に浸潤せんとす是基督教進步の一段落として寧ろ喜ぶべしと雖ども亦斯教立脚の地步を確め以て信仰の大本を明にすべきは實に信徒今日の急務なりとす。本書は博士デール氏の原著にして松尾氏の飜譯に係る。其主として論明する所はかの怒濤逆卷く批評界の眞中に卓立し確として活基督を信仰すべきの道を示すにあり。所謂信仰の大本斯教の根蒂を確論せるものと謂ふべし博士は英國ボルミンハム獨立教會の牧師にして。學識卓犖度量寛宏實に現今獨立教會中第一流の人物なり教會の職にある于茲三十餘年夙に英名天下に高し昨夏万國「コングレゲーション」教會の大會あるや氏推されて之が議長たり。又氏は政治社會に於て勢力あり自由黨員として非國教論者としてグラッドストーン派中の錚々たるものなり。以て氏が平生を知るに足る。則ち本書の如き氏が多年の實驗と浩大の識見に由て著述したるものなれば其價値既に定論あり何んぞ贅言を要せん譯文亦簡明にして意を盡せり。願くは江湖の諸君必ず一本を購求して其所論を熟讀し給はんことを

Seek Truth And Do Good

精神的講話

デホレスト君演述 三宅荒毅君譯

定價十五錢 郵稅四錢

君子は器ならずと教育の目的は器械的人物を養成するにあらずして活人物を世に出たすにあり然るに今や教育社會の現狀を察するに智育に偏して精神的の教育を欠く者多し何ぞ偉大なる活人物の輩出するを望むべけんやデ氏茲に深く憂慮し仙臺東華學校設立以來九ケ年一日の如く誠意誠心以て學生を薫陶し基督教の眞理に基づき精神的の教育を授けらる今や已むとを得ず閉校の期に際し平素氏が講演したる十數篇を編して一小冊子となし氏が愛せらるゝところの子弟に紀念の爲め贈らる本書は長幼男女を問はず誰人にても一讀せられなば稗益する處少々にあらざるべし

發兌 大坂土佐堀三丁目 福音社
賣捌 東京新橋出雲町壹 警醒社書店

第四回豫約出版廣告

文科大學教授 物集高見先生著

ことばのはやし

全一冊 凡千八百頁 豫約正價金二圓九十錢且外に郵稅二錢●豫約期限四月三十日豫約金一圓御送附殘金は五月十五日より送金の順序を以て製本を遞送す

右は古代よりの國語を集めたる字書にして註釋詳明例文許多なれば國文研究に至便なり曾て第三回勸業博覽會に於て公衆の評に由り時事新報社より金牌を得たる美麗の珍書なるとは余が喋々を待たず今已に一本を殘さず因て又第四回豫約を募り五百部を限り印刷に附し有志諸君の請求に應ぜんとす請ふ期限を誤る勿れ幸甚

●女學雜誌社出版書籍

右今般本社ト特約ノ上販賣仕候間續々御注文ヲ乞フ

東京市日本橋區本町三丁目 瑞穗屋清水卯三郎 謹白

雅俗諸躰 作文口授 全

一名國文教科書 鈴木弘恭先生口述

此書ハ大人カ各學校ニ於テ實地ニ授業シタル者ヲ筆記シタルナレバ國文ノ作例ハ勿論許多ノ熟語ヲモ擧ラレタリ此書ヲ一日セバ如何ナル初學ト雖モ消息記事論說諸躰ノ雅文ヲ立所ニナシ得フルベシ諸君速ニ購テ試ミ給ヘ

出版所 神田美土代町四丁目五番地 敬文堂
賣捌所 麴町下六番町六番地 女學雜誌社

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY